オアシスの森の「アカマツ林再生プロジェクト」について

2015.6.28

環境カウンセラー　高岡立明

（1）

名古屋市では、長期未整備公園緑地を「オアシスの森」方式で、市民と協働で整備しようとしています。相生山緑地の北半分は、その先駆的典型とされました。

これまで進められてきた相生山の「アカマツ林再生プロジェクト」（下記看板参照）について、違和感を覚えますので、森の様子と人とのかかわりについての事実をもとに考えてみることにします。

「世界の AIOIYAMA」公園構想検討が始まる今の時期、今後の指標を探るために。

プロジェクトを実行するなら、最初に事実とそれを基にした予測を立て、「相生山の森を今後どうしていくのか」立案し、実施しなければいけないと思います。

これが、通称「周回道路」脇に立てられている看板です。

気づいた点を　あげましょう。

①看板には「再生」と書いてあります。再生というのであれば、いつの時代の、どの場所を対象にしているのか、説明がほしいところです。

②「近年森が手入れされなくなり・・・」と書いてあります。相生山において、人々は「森を利用していた」ことはありますが「手入れ」していた形跡はありません。

では、森を利用していたころは、どんな森だったのでしょうか。

そして「利用しなくなって」、どのように変わってきたのでしょうか。

③「ゴオかき」について

看板の説明は、行われてきた事実と認識が異なっていると思います。

(2)

森を利用していたころの　森の様子はどうだったのでしょう

戦後、例えば徳林寺の北（現在学童保育所がある付近）には、およそ 0.2 ヘクタールほどの松林がありました。また、野並集落の高台の部分（相生 28 番地の西方）にも、高木のマツがまばらに生えていました。その他の場所、特に人家の近くに多少あったかもしれません。

しかし、それらのマツは伐採せずに残っていた感じのものです。それらは疎林で、現在の相生山緑地全体から見ればごく一部分でしかありません。

昭和 30 年/1955 年の航空写真

畑地は白い四角形に見えています。

黒いところはヒサカキなどの常緑が混じる低木群落。大部分を占めるグレーの部分は「はげ山」に近い状態　でした。

下中央が徳林寺。敷地内に大きな水滴形が写っていますが、その北西側の黒い部分が前述の松林です。

当時、相生山の一部分に存在した松林は、美保の松原のような立派なものではありません。自然に残っているというよりは、人為的に残されている感じさえしました。残す何らかの理由があったのかどうかは分かりません。

また、それらの松林はアカマツではなく、クロマツがほとんどだったと記憶しています。（アイグロマツやアイアカマツも多少混じっていたかもしれません）

ですから、人が森を利用していた場所には松林はなく、残されていたと思われる松林それらを含めても、看板に書かれているようなアカマツ林はなかったのです。

では、当時の人々は相生山の森をどう利用していたのでしょう。

それから森は、どのような変遷を見せてきたのでしょう。

(3)

森の利用　そして　生活スタイルの変化

かつて名古屋東部丘陵地あたりでは、マツや松の落ち葉の“ごう”は、薪と同様に炊事や風呂焚き、たき火などに使われました。松は油成分が豊富なので火力も強く、他の落ち葉に比べて利用価値は高かったと思われます。

昭和 30 年代から石油を使い始めたのですが、それまでの“かまど”で薪をつかっての炊事は石油・ガスへと変わり、かまどや薪を使わなくなりました。お風呂でも薪は使われなくなりました。

昭和 39 年/1964 年の相生山緑地の様子です。

森が利用されなくなり、樹木が成長を始めるころの冬の風景 —— マツ・ヒサカキ・ネズ・枯れたススキなどが分かります。

石油が普及していなかったころは、よく燃える松は、落ち葉も含めて燃料にされていました。だから、ほとんどのマツは大きく成長する間もなく、背丈は 2 メートルにも届かないマツ林と言えないマツ―ツツジ群落を形成していました。マツが少ない場所では人の利用も少なく、ヒサカキが優占する部分もありました。

さて、では大量の松枯れがあり、マツ林の痕跡を感じられるのはなぜでしょうか？
また、マツが多い森では火事の延焼にも勢いがあり、確かに以前、相生山でも火事が起きています。
いったい、いつ相生山に松林が出現 したのでしょう。

(4)

相生山のマツ林成立

石油を使いだすと松の利用も減り、マツの生育に都合のよい痩せた土壌では、腰の高さにも満たないようなマツの幼木が勢いよく成長をし始めました。 そんなに時間を要せずに、マツは中高木へ成長をしました。その時のマツ林（クロマツ、アカマツ、アイグロなど）の痕跡があるのです。
つまり、人の利用がなくなりマツは成長した のですから、看板で書かれていることの正反対ですね。

「オアシスの森づくり」現場
2015.6.24

看板に書かれた方針で、「伐採整備」が進められていますが・・・

常緑低木が伐採された後

数年もしないうちに、マツだけではなく様々な樹木も、いっせいに成長し、伐採前よりも繁茂するような状態になってしまっています。

伐採後、繁茂した場所

その後の植生の移り変わり

その後、マツ以外の様々な木々も後を追うように成長をはじめ（部分的にはクスノキが顕著な場所もあります)、そしてマツクイ虫の被害が始まりました。

土壌もゴウカキがなくなり、マツの成長には適さなくなってきました。

ついに、マツは一部名残を見せながら、コナラが優占する森が広くなってきます。

そのコナラも、カシノナガキクイムシによって、かなり個体数が減ったようです。

そのギャップでは、太陽の光を待ち望んでいた低木たちが、いっせいに背丈を伸ばし始めています。その中にはシイノキも見られます。

コナラ林と枯損木のギャップ
2014.10.10

それが、名古屋東部の森の変遷の主な形になります。

(5)

相生山（オアシスの森）の植生の流れを　今一度まとめてみると

戦後しばらくの間・・・・・森を利用していた時期

1　はげ山に近い状態の【マツ―ツツジ】【ヒサカキ】などの群落
　林とも言えないぐらいの、まばらな【コナラ・アベマキ】【クロマツ】など
　そして【桑畑 → 野菜畑】 としてあらわされるような土地利用

石油の普及以後・・・・・・森の利用が激減

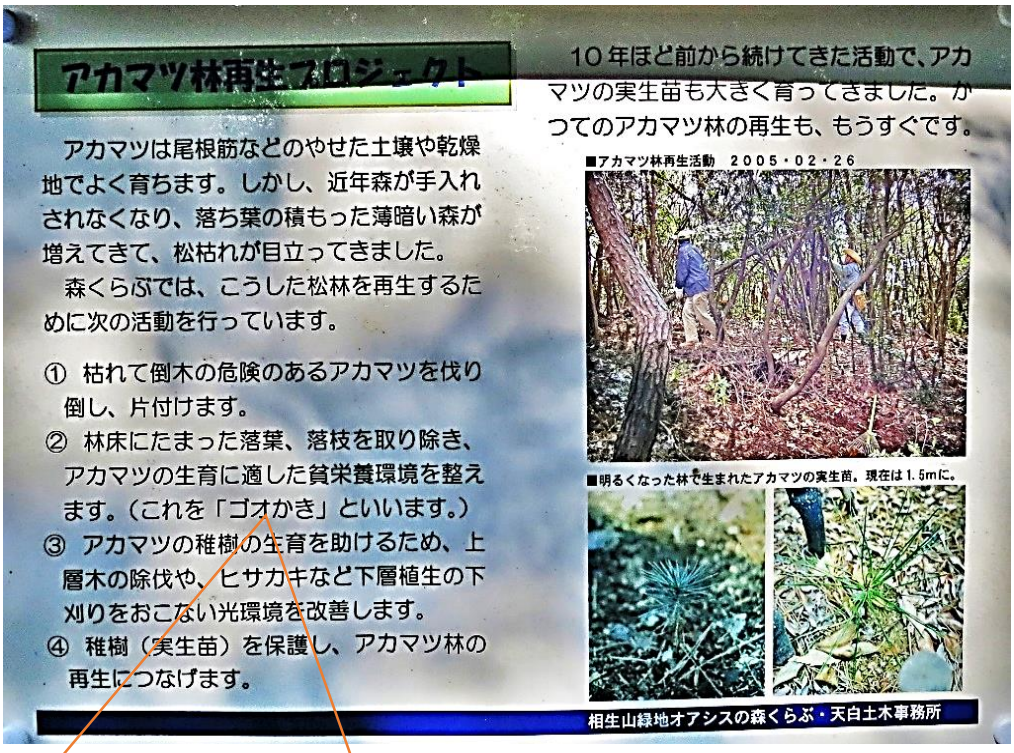
2　松の利用（ゴウカキなども含む）がなくなり マツが成長　→　マツ林ができる

3　マツクイ虫と土壌の変化による　マツの後退と コナラ林の拡大

4　カシノナガキクイムシによる　コナラの減少と 多種な樹木の生長

5　シイの出現が見られるようになった

（スダジイか、ツブラジイとその中間的なものかは、未だわからない）



なお、看板にある**「ゴオかき」**という言葉ですが、
「ゴウ」・・・・・・松の落ち葉
「ごうかき」・・・・①熊手　②ゴウを集めること
「ごうかき」をする・・・松の落ち葉を集める　というような意味で、
「ごうかきをする」目的は、燃料を集めることです。マツに適した土壌を作ることではありません。

自然や人の行為の事実や言葉の意味を間違えたのか、それとも「アカマツ林再生」という目的のために、故意に捏造したのかは分かりませんが、ここでも言葉が事実とは異なって使われています。

これまで、戦後の森の様子を書きました。
ところで、それ以前はどうだったのでしょう。
森が利用されていて、マツ林が成立した時代は、なかったのでしょうか。

古代からの相生山の森のようす　を推察してみます

千種区・天白区・名東区などは猿投古窯群の中心地です。焼き物製造地としては、粘土・水・燃料・運搬の便などがそろっていることが有利になります。

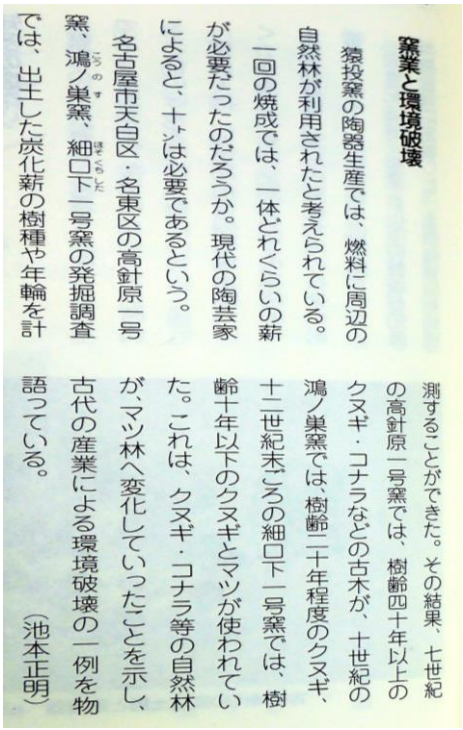
弥生時代より、焼き物は東海地方から近畿方面へ運ばれていたか、影響を与えています。

7 世紀ごろから焼き物が行われていたようで、鎌倉時代には多くの焼き物が作られ、この天白から近畿方面へ運ばれています。

あゆち潟の海岸線は、今より内陸まで入り込んでおり、野並・島田・植田・日進方面は海上輸送に有利な場所であったことに加え、粘土・水・燃料もその場で調達をすることが出来ました。

この燃料として森が伐採され使われたと思われます。当時の森の様子は花粉分析によって、ある程度推察することが出来ます。

古代から中世にかけて、森の利用が高まると、おそらく照葉樹（よく分っていません）であった森はコナラ―アベマキ、コナラ―アベマキ―マツと変遷したのでしょう。



窯業と環境破壊

猿投窯の陶器生産では、燃料に周辺の自然林が利用されたと考えられている。一回の焼成では、一体どれくらいの薪が必要だったのだろうか。現代の陶芸家によると、十トンは必要であるという。

名古屋市天白区・名東区の高針原一号窯、鴻ノ巣窯、細口下一号窯の発掘調査では、出土した炭化薪の樹種や年輪を計測することができた。その結果、七世紀の高針原一号窯では、樹齢四十年以上のクヌギ・コナラなどの古木が、十世紀の鴻ノ巣窯では、樹齢二十年程度のクヌギ、十二世紀末ごろの細口下一号窯では、樹齢十年以下のクヌギとマツが使われていた。これは、クヌギ・コナラ等の自然林が、マツ林へ変化していったことを示し、古代の産業による環境破壊の一例を物語っている。

（池本正明）

【参照文献 ： 遺跡からのメッセージ～発掘調査が語る愛知の歴史～加藤安信（編）中日新聞社】

その後は、江戸時代の絵などを見れば、マツ（疎林）が中心で萩・ススキなどが生える、はげ山に近い森のような印象を受けますから、戦後間もないオアシスの森とあまり変わらない様子が想像されます。

【参照文献 ：「尾張名所図解」のうち「中根村」（瑞穂区）名古屋都市センター広報誌「ニュースレター」特別企画「なごやのまち今昔」より】

推察をまとめると、**相生山緑地の植生のおおまかな変遷**は

古代：照葉樹？から　コナラ―アベマキへ（焼き物の燃料）
中世：コナラ―アベマキ
中世～近世：コナラ―アベマキからマツへ
近世～燃料革命：マツ（疎林と低木）
燃料革命後：一時的にマツが優占
以後：コナラ―アベマキ

このようであったと思われます。

今、オアシスの森にどの時代の森を「復元」させるというのでしょう。

「マツ林再生のために」
現在すすめられている
「手入れ」
2015.6.24

事実認識を改め、再検討することが望まれます。

完